

黒

くろ
black



- 胡粉
- 日田杉
- 紅藍
- 藤黄
- 藍

関アジ・関サバから絵の具づくり!?

炭黒の

ピグメントからインク系まで

絵の具としての「黒」は、水墨画では「墨に五彩あり」といわれるほど、微妙な差がある。江戸時代以前、その多くは植物・動物を炭化させてつくられていた。炭化させる素材により、微妙な色味の変化、黒の質感が生まれる。

牛の骨を炭にしてつくる“ボーンブラック”、象牙から“アイボリーブラック”、桃のタネの核・桃仁からは“ピーチブラック”、葡萄の蔓からは“バインブラック”と、それぞれ炭化して得られる黒だが、今では色名だけが残り、人工的につくられるモノが多くなった。例えばボーンブラックは、2001年の狂牛病以来、未だに製造中止らしい。一方、アイボリーブラックは、メーカーによっては今でも象牙からつくられているが、いつまで続くのか。そして“ランプブラック”は今も昔も変わらず煤から作られており、東洋では膠で練り固め“墨”となる。

材料が色名の一部として残っているのなら、大分県の黒い絵の具としては、何が考えられるだろう。関アジ、関サバ、姫島車エビ。どれも大分の特産品だ。笑い話にしか聞こえないと思いつつも、まじめに取り組んだ。

初めてつくってみたのが“関サバ ボーンブラック”と“関アジ ボーンブラック”。美術館近くの居酒屋に行き、骨をもらえないか相談してみると、「骨から絵の具なんてできるの？」と女将は不思議そうな顔をしながら分けてくれた。姫島の車エビは、島の小・中学校へアウトリーチに行くたび、昼食に焼車エビ定食を頼み、殻は美味しいのに食べずに我慢して持ち帰った。炭をつくるには、空き缶に入れてガスコンロにのせ、蒸し焼きにする。植物系、例えば木の枝や松ぼっくりの場合、燻製のような匂いすることが多く、その匂いについては、好き嫌いがわかれる。牛の骨など、動物系はとて嫌な臭いがする。リンが燃えるからか、火葬場の匂いに近い。しかし“姫島車エビ シェルブラック”は香ばしい匂いとともにできあがった。

その後は、この話を聞いた講座の参加者が持って来てくれた豊後梅で、スティック状の木炭をつくり、直にデッサンを描いてみた。もちろん粉砕して“豊後梅ブラック”もつくった。竹田市荻町は、おぼけカボチャと呼ばれる巨大なカボチャが有名で、カボチャ農家の子どもも少なくない。竹田市立荻小学校のアウトリーチでは、カボチャのタネを持って来てもらい、“パンプキンブラック”をつくった。日田市津江地区では杉の幹・枝・葉から“日田杉ブラック”をつくった。こうしたことを続けていると、時々、嬉しい電話もかかってくる。「猪まるごと一頭料理するけど、骨いる?」。こうして“イノシシ ボーンブラック”“イノシシ爪ブラック”ができあがった。

- 1 缶に入れて蒸し焼きにする。上からイノシシ、姫島車エビ、関サバ。
- 2 ガスコンロでひたすら加熱。この作業は美術館ではできない。
- 3 炭化が始まると木ガスが生じる。このガスには火がつくので要注意。
- 4 できあがった炭。
- 5 植物タールのため、缶の蓋を開けるのは一苦労。
- 6 炭化した関サバ。

